

書評 : A.M.EVANS著 「An Introduction to Ore Geology」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川平, 裕昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025522

〈書 評〉

A. M. EVANS 著「An Introduction to Ore Geology」*

川 平 裕 昭**

地学の中でも鉱床学の分野はこれに興味を持つ人にとっては身近かに適当な本があまりなく条件が悪いのが現状である。国内では、古くは渡辺武男編「鉱床学の進歩」(富山房)や瀧本清著「新版・鉱床地学」(ラテイス刊)あるいはV・I・スミルノフ著「新版・鉱床地質学」(ラテイス刊)等が出版されている。スミルノフ氏のは、ソ連や東ヨーロッパ諸国の鉱床地質の実態が細かく述べられている。しかし、いずれも程度が高く、入門書とは言えない。そこで、外国のもので何かわかりやすいものがないかを捜したところ、幸いイギリスで学生向きに出版されたものがあることがわかり取りよせたのが、表題の本である。この本は鉱床学をはじめて学ぶ者にとっては、適当のものであると思う。英文であるが、文法的にはやさしくわかりやすい。地学英語研究会編の「地学英語」を辞書がわりに使えば専門用語についても問題なく訳せる。入手にさいしては、少し大きい店で注文するか、洋書専門の通信販売をしている所(例カンダブックトレーディング)を利用するか、あるいは上京の際日本橋の丸善あたりに注文すればよい。内容について少しふれてみると、まず本書は、Part 1～3にわかれ、Part 1に鉱床学の一般的な事が多く書かれている。鉱石、脈石、及び初生鉱石の序論的定義と議論からはじまり、鉱床の主要な型の性質と形態についてくわしく書かれている。また、鉱石と脈石鉱物の組織と構造、流体含有物、母岩の変質についても著者のするどい洞察がうかがわれる。特に鉱床成因論については、簡単な分類、地表過程による起源と内部プロセスによる起源、ペグマタイト生成過程、熱水過程、変成過程、についてくわしく述べている。鉱石の品位についても経済的な面から考察しており、世界各国の事例も多く調査してある。また地球化学的な考察が多いのも興味深いし、地質学者の鉱床の概念と採鉱技術者の鉱床の概念の差にも着目しており、読者を楽しませてくれる。Part 2以後の各論は、貴金属鉱物の金、白金、銀、主要金属鉱物資源の銅、鉛、亜鉛、スズを中心に述べ、軽金属では、アルミニウム、チタン、マグネシウムの鉱床、鉄鋼原料鉱物資源では、鉄、ニッケル、コバルト、クロム、マンガン、タングステン、モリブデン、タンタル、バナジウム等が記載されている。燃料鉱床では、石炭、石油、天然ガス、オイルシェール、オイルサンド、核原料鉱床としては、ウラン、トリウム、セシウム、ルビジウム、ジルコニウム、ベリリウム等がくわしく書かれている。その他、電子工業原料のカドミウム、水銀、ヒ素、シリコン、テルル、セレン、ゲルマニウム、ガリウム、インジウム、化学工業原料の硫黄、リン、リチウム、カリウム、アンチモン、ビスマス、バリウム、ストロンチウム、氷晶石、ホタル石、珪石、長石、陶石、陶灰石、石灰石、ドロマイト、石コウ、岩塩、臭素、絶縁耐火材のカオリン、石綿、沸石、宝石研磨材のダイヤモンド、ザクロ石、コランダム等多くの鉱床についてくわしく述べている。Part 3はまとめとして、世界各地の鉱山事例が写真入りで解説されている。

* (GEOSCIENCE TEXTS VOLUME 2 University of Birmingham) BLACK, WELL 1980. B 5 版, 231 p. £ 7.5 (約 4,000 円)

**三島市立錦田中学校